



オヘ チュリヒ歌劇場《ゲノ
ヴェーヴァ》プレミア

カーテンコールではブーイング組と「ブラヴォー」組がしばらく叫び合っていたこの演出が、どちらにしても冒頭から音楽への集中力を妨げていたことは否定できないであろう。シューマンがこの物語を知ってすぐ、その感動を託して仕上げたという序曲。それを、無味乾燥なパントマイムに注意をそらされながら、聴かせなければならないのか。アーノンクール率いるオーケストラは、緻密、かつドラマティックではあったが、ロマン派らしい叙情性が欠けていたと思われるのも、視覚からの悪影響かもしれない。

題名役のユリアーナ・バンセの声はこのところめっきり成熟し、ドイツ・リート的繊細さを必要とするこの役にピッタリだった。マセイのゴロー、ガントナーのジークフリートも同様で、アーノンクールの棒のもと、室内楽的な部分では素晴らしかっただけに、演出家に腹立った。夫婦の別れの二重唱が、あんなにロマンティックに書かれているにもかかわらず、2人が近付き、夫が頬をなで、額にキスし、妻が倒れかける、という一連の動作を無表情に5回以上も繰り返して、冷笑を呼び、不要な本物の犬を舞台上に登場させ笑いを誘う。マルガレータが意識を失っているゴローの顔にまたがる、ゴローにキスする、ジークフリートを看

病する看護婦に変装したはずなのに、股間に腕を通し、ジークフリートが振り返るとズボンの前を開け、下着までしっかり見せる、最後には魔法の鏡に映し出された設定のゲノヴェーヴァが一糸纏わぬ後ろ姿で髪をとかしている、そんなシーンが何のために必要なのか。やたらと血が飛び散り、毎回バルコニー席に並んで観劇しているマエストロのお孫さんたちの反応を思わず心配してしまった。シューマンがこのオペラで伝えたかった感情はこのようなものとは程遠かったはずだ。 (中 東生)

